

幼児の疑問

—その実態と取り扱い方—



相川 高雄

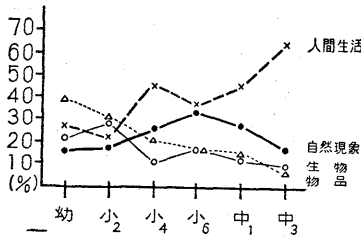
科学者は、童心を失うな。……子どもたちがあらゆるものに目を向ける疑問の目が、科学者の目である。……とは、しばしばいわれることばである。科学者だけではない。子どもたちの、純心で、素直で、虚構のない新鮮な驚きの声、新奇な目には、おとなたちがいつも考えさせられている。

△どのような疑問が多いか▽疑問の実態

ひと口に疑問といっても、ごく単純なものから複雑なものへと、種類や要因も多い。

私と堀内敏が調べたものを参考に^(注・一)して、幼児の疑問について、まず、その領域から考えてみよう。

第1図 疑問の発達の傾向



(1) どのような種類が多いか……疑問の種類

幼児は、どのような対象に向けて、疑問を感じるのであるのか。対象の種類をあげて、その領域を明らかにしてみよう。もちろん、幼児の特徴を見出し出すには、幼児期だけの疑問をあげただけでは、はっきりしないので、これを、小学校児童や中学校生徒との関連で触れてみたい。

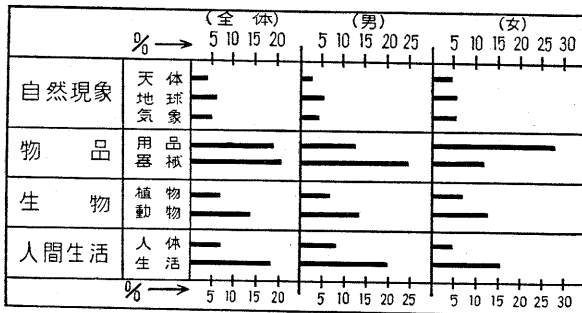
第1図は、幼児から中学三年ま

での疑問の種類を、自然現象・生物・物品・人間生活の大きな四つの領域に分けて、学年的発達傾向にしたがってみたものである。この領域の分けかたは、堀七蔵が昭和十七年から十八年にかけて研究した資料を参考にしたもので、それぞれの領域は、それぞれ細かな種類に分けられる。私たちの研究した疑問の種類をみると、およそつぎのようになってゐる。



この領域を發達的にみると、右にあげた領域、この種類から理解できるように、物品に関するものが四〇%近くある。つぎに、人間生活がおよそ三〇%、生物が二〇%、自然現象が一五%と、それぞ

第2図 幼児の疑問の種類



れ大差なくあげられている。ところが、この傾向は、小学二年生と四年生ごろから入れ代って、中学三年になると人間生活への疑問が増大し、自然現象・生物・物品の順になってくる。前にあげた堀七蔵の研究では、幼児に関するものはないが、小学一年生では、物品が四〇%近くあつて、つぎに自然現象の二五%、生物・人間生活のそれぞれ二〇%近くがあげられている。時代差や発達差の原因とい

つたものを明らかにしたいけれども、それは、この稿のねらいではないので省略したいと思う。

さて、幼児は、それぞれの領域でどのような疑問を抱いているのであろうか。その種類を、さらにくわしくみていくと、つぎのようになっている。まず、注目すべき点だけについてみると、第2図にあきらかなように、幼児の疑問のなかで四〇%を占めた物品で、男児と女児の抱く疑問の傾向

が違ふことである。物品の全体では、用品と器械が、それぞれ二〇%前後で相半ばしているが、男児では、器械に関する疑問が二五%で、用品の十三%のそれより多く、女児では、用品に関するものが三〇%近くあつて、器械の十二%よりはるかに多くなつてゐる。自然現象・生物・人間生活では、性差がみられないのに、幼児が身近かの環境のなから、まずはじめに興味を抱き、それから疑問を感じていくと考えられる物品に男女の性差がみられることは、十分注目してよいことである。つぎに、生物では、植物より動物に、そして、人間生活では、人体よりも生活そのものに、幼児の疑問が向けられていることも注意をしたいと思う。

また、第2図からも理解できるように、幼児の疑問は、器械・用品・人間の生活・動物・植物・人体・地球・気象・天体という順であつたことも考慮してみたいと思う。

しかし、幼児の疑問に應えるためには、以上のような概括された疑問の領域を、さらに細かな種類に分けて、その対象を知ることが大切である。幼児の疑問の目は、いったいどこに向けられているのだろうか。

まず、男児は、器械、女児は、用品という傾向のみられた物品からみていくと、器械では、男児が、おしなべて関心を示す交通に関するものがほとんどである。ことに、飛行機・自動車・電車・汽船・オートバイの順である。つぎが、電気器具に関するもので、電気・テレビ・ラジオなどである。つ

ぎに、楽器・月ロケットなどがあげられている。用品では、学用品に関するものが多く、クレヨン・鉛筆・紙など、さらに、火・燃料・家屋などに関するものがあげられている。

人間生活では、人間に関するものとして、生理・身体・死・発生進化・皮膚・毛・出生があり、生活に関するものとして、教師・学校・学習・友人・言語・社会など、身近な生活に関するものが多くあげられている。

生物では、動物に関するものとして、虫類・鳥類・家畜・魚類などが多い。植物の方では、草や木・花などに関するものである。

自然現象では、天体に関するものうち、月・空・太陽・星が多く、地球に関するものでは、岩石・土・水・海・山・金属・地球などが多い。気象では、台風・風が多く、風・雷・雲・雪といった順である。

このようにみてみると、幼児の疑問は、多くの種類があげられていて、その領域や種類は、ある程度、理解できても、それに答えるのは容易ではなさそうである。一体、何を求め、どのような解答を必要としているのであろうか。これらの疑問の声をきくと、単純なものから複雑なものへといろいろである。どのようなところから疑問が発生するのだろうか。また、どんなところが解らないのだろうか。疑問の発生要因といったものを明らかにしてみよう。

(2) どこに疑問があるのか……疑問の発生要因

疑問には、説明を求めようとするもの、理由、因果関係を求めようとするものなど、同じ疑問の領域の同じ種類の疑問でも、その起り方が違う。例えば、天体のなかの月に関するものでも、どうしてお月さまというの(名称)、どうして光るの(機能・属性)、どんな形をしているの(形態)、どうしてできたの(発生)、大きさをどのようにして計るの(研究・探究)、なぜあるの(存在)、どうして動くの(運動)などと、どんな点に目を向け、何を求め、何が知りたいのか、発生の要因が、さまざまであるのに気がつく。

幼児の疑問のなかに、何が重要な発生要因となっているのか、何を求めようとして疑問を生じたのか、その探究心の発生原因をみぬくことが大切であろう。

私たちの調査では、つぎのようになっていく。

まず、物品のうちの用品についてみると、クレヨンは、どのようにして作るのか、といったこと(製造)に関するものは五〇%以上を占め、つぎが、消しゴムは、どうして消すことができるのか(機能)といったものが二〇%、属性・構造が、それぞれ一〇%ずつになっている。また、器械では、自動車は、どうして動くか(機能)の五〇%、製造・創造の二〇%がめだっている。

人間生活では、ほとんど人体に関するもので、出生が四〇%近く、機能の二五%、現象・生長などが多い。また、生活そのものでは、能力や機能・価値・存在・精神・心理といったもので多岐にわたっている。

生物については、動物の習性や属性の三〇%、形態の二五%、機能の二〇

%、出生・発生の一五%などがめだっている。植物では、習性・属性の二八%、繁殖・成生の二五%、機能などである。

自然現象のなかでは、地球の発生・成立が五〇%、属性の二〇%、現象、運動・構造などが多い。気象では、台風の発生や雨などの発生が多いが、台風の発生がほとんどを占め、四五%である。ついで属性の二〇%、機能、運動、現象、存在などである。地球と気象に関するものは、よく似ている。天体については、属性の二五%、構造の二〇%、形態、機能、運動、現象、発生など、多くものがみられる。

こうしてみると、それぞれの領域に共通する要因がみられるようである。すなわち、幼児が、自分の生活との触れ合いのなかで、まず、それがそこにどうしてあるのか、その名前は何かというのか、どうして生まれ、どのようにして作られてきたのか、どうして、そのような形をして、どんな働きがあるのか、といった一連の疑問のつながりがあり、そこに、幼児期の疑問の特徴がみられるのである。疑問の生じる要因として、存在↓発生・出生・製造↓成立↓属性↓構造↓機能といった要因がくりかえしの形でみられるように考えられる。

△どのように取り扱ったらよいか▽
疑問の取り扱ひ方

幼児の疑問をどのように取り扱ったらよいか、ということとは、幼

児の疑問の事態やその発達から、当然理解できることであるが、そのようなものだけに限って理解するのみでは、十分ではないだろう。また、取り扱ひ方でも、個々の偶発的な疑問に対するものと、組織的・計画的な幼児の教育において取り扱ひものと考えなければならぬだろう。これらのことを考えながら、取り扱ひ方のいくつかをあげてみたいと思う。

1. 幼児の疑問を、幼児の他の心理的特性と関連させて理解し、位置づける。

幼児の心理的特性は、感覚・知覚・運動・感情・記憶・思考といった要素が、ひとかたまりになって複合して、ある要素が働らくとき、それぞれ分化しないで、一しょになって働らくということである。疑問との関連では、ことに、知覚・言語・思考などが、どのように発達していくかという過程をみなければならぬであろう。子どもが未知の世界を見る。それを他人に通信する。その見方も通信のしかたもおとなど違う。だから、おとなは、はなしことばや知覚から抽象への過程を理解しなければならぬ。物の名を知ったり、人の名を知り、人と交渉しているなかで、自分の対象世界ができ上り、それをもとにして、目の前に存在しないものを探究しようとして、探したり、質問したりするようになる。ことばに対象がくっついてくると行動や体験が社会化されるようになって、生活の範

囲が拡がってくる。また、感情も育ってくるから、知覚や経験に感情を入れて考えるようになる。生活の拡大は、当然、物の名を質ねたり、だれ、どこ、いつ、という疑問詞になったりする。言語で推論できるようになるから、なぜ、という質問が生じるようになる。そのようになると、計画や仮定を立てたり、比較・条件的表現もできるようになる。これらは、三、四才頃までの特徴であるといわれているように、まことに、知識欲が盛んである。

しかし、四才頃からめだつて多くなる「なぜ？」という質問は、事物を知ろうとするだけでなく、原因・理由・因果関係など、科学的な思考のめばえとして重要な意味をもっている。疑問の事態においても明らかにしたように、対象・種類・領域などが同じであっても、求めようとする発生要因が違うことに注目して、なぜを位置づけたい。知りたいがための「なぜ」（求知的なぜ）が、なぜの基本的意味をもっているときれているが、幼児の疑問に、この種のものの多いことは、そのことなかに、習慣的行動の打破・考え方の矛盾、あるいは、問題解決の障害などを発見しようとして発するものであることをみぬくことが大切である。

四才ごろから、徐々に「因果的なぜ」が、あらわれ、六才ごろから因果的な思考ができるようになっていわれているが、また、具体的に直観的に行なわれ、しかも、自分の考えを一方的に主張するの、おとなには、理解しにくい。他人の立場になって、考えたり、

証明したりできないから、自己中心的な疑問になる傾向がある。それは、また、感情的でもある。また、親や先生の愛情のたしかめや、独占のための「なぜ？」の質問になったりする。したがって、ここに、幼い探究心を育て、人間形成をはかるための幼児の疑問の取り扱ひ方が大切になってくる。ことに、かれらが、偶発的に発する疑問に対する答え方が問題になる。

2. 偶発的な質問を大切にして、かれらの探究心の芽生えを育てていく。

細かな説明は、割愛して、要点をあげてみよう。

●前に述べたように、幼児の心理的特性は、複合し合っていて、理解しにくいものであるが、できるだけ、幼児の疑問とするレベルにおいて、同じような感情や思考や態度で接することである。ハツとする気持、オヤツといういぶかりの目など見逃さないようにすることが、かれらの鋭い観察眼や態度を育てることになる。

●答えるまえに、子どもと同じ気持になって、親も先生も首をひねって考える。また、そのような素直さが欲しいものである。

●疑問は、疑問としてのごす。疑問が、いかげんな答えで満足されることのないように、幼い探究心を芽生えさせるようにしたいものである。

●観察力や描写力を伸すように、絵で説明したり、図を描いた

り、写真をみせたりして、視聴覚にうったえる。

●男女差や性格・興味の違いで、疑問のあり方が異なることを知っておく。

3. 幼児教育の観点から、幼児の疑問を組織的に分析して、それを、幼児の生活構造・言語などの保育内容との関連で、保育計画に取り入れるようにする。また、一方、教師の方でも、疑問に対する知識も蓄積する必要がある。

幼児の探究心を育てるために、かれらの疑問に答えうるだけの知識も、われわれに必要である。「うーん」とうなつてばかりいては、かれらの明日の世界への希望をつみとってしまうだろう。

(注・一) 相川高雄・堀内敏、疑問の発達の研究(1)——量的研究、第一回日本教育心理学会発表、および、疑問の発達の研究(2)——発生要因の研究、第二回日本教育心理学会発表の一部による。

(注・二) 堀七蔵、疑問の心理、理科学習の心理、教育心理学講座 11、昭和二八年、金子書房。

(愛知学芸大学)